

[書評]

菅原祥『ユートピアの記憶と今——映画・都市・ポスト社会主義』  
(京都大学学術出版会、2018年、284頁)

亀田 真澄

国家規模のトラウマを人々がどのように想起し、修正し、語り、忘却するかという問題において、イデオロギーと生活の記憶が複雑に錯綜する共産主義時代の経験は、一義的な意味付けを拒むという点で独自の事例を提供してきた。旧共産圏の記憶をめぐる問題というテーマは、スヴェトラナ・ボイム、アレクサンドル・エトキント、マリア・トドロヴァなどといった研究者たちをはじめとして、2010年代末に差し掛かった現在においても、ますます多くの研究成果が出されており、ロシア東欧圏において研究の活発な分野の一つと言えるだろう。戦後ポーランドを分析対象とする本書は、「ユートピア」としての社会主義体制が陰りを見せたとき、それがどのように批判的に表象され、また一方では過度に肯定的に語り継がれてきたかという点に光を当てるものだ。「近代における『ユートピア的想像力』を現代的な意義と可能性を持ったものとして今改めて再考する」(14)<sup>1</sup>という問題意識を強く打ち出しながら、ポーランドにおける社会主義時代の「ユートピア」の記憶や、それを参照するという行為が、現代社会においては埋もれてしまって見えない「希望」を掬い上げる可能性を秘めていることを示す意欲作である。

以下ではまず、本書の要点を紹介したい。

第一部「ポーランドの雪どけと社会的想像力——映像文化を中心に」では、1956年以降の雪どけ期のポーランド映画において、これまでタブー視されていたテーマがいかに取り上げられるようになったかを分析するものだ。「社会主義リアリズムの詩学によっては汲み取れないような欲望のあり方」(95)の代表例として、著者が取り上げるのは、退廃的・快楽主義的にも見えうる性愛のテーマと、非行少年の善人としての一面を描くテーマの二つである。性愛のテーマとしてはアンジェイ・ワイダ『地下水道』を、非行少年のテーマとしてはドキュメンタリー映画の4作品を分析した上で、これらのテーマが雪どけ期のポーランドに現れたということ自体に、著者は「ユートピアの夢が幻滅に終わったあとの、『ポスト・ユートピア的』な想像力への変化」(173)を見ている。快楽主義的な側面を思わせる恋愛関係や、非行少年が実は善人であるということを明らかにするプロットは、著者によると、「『現実』のまなざしかたに関する知覚・意識の変革を象徴」(172)するものである。なぜなら、著者によると、これらのテーマが解禁されたということ自体に「『スターリニズム』の枠を超え出るよう

な社会的想像力の可能性」(255)があるためである。

第二部「ポスト社会主義時代におけるユートピアの記憶——『ユートピア都市』の過去と現在」のほうは時代が下り、ポスト社会主義時代のノヴァ・フータが研究対象である。ノヴァ・フータに今も暮らす「生き証人」たちが、いかに社会主義時代について語るかということが、著者自身のインタビュー記録に基づいて検討されている。これらの語りから著者が明らかにしようとすることは、「多くの住民たちが抱えている『ノスタルジア』のようなものは、決して単なる無意味な懐古などではない。むしろ逆に、これらの住民たちの意識のなかにおいて、こうした過去の記憶は、現在のポーランドにおける様々な問題を積極的に批判し、捉え返すためのリソースとして機能している」(232)ということである。

1950年代のポーランド映画分析とノヴァ・フータにおけるフィールドワークに基づく考察を通して伝わってくるのは、人々が社会主義政権下で過ごしていた毎日の実感だ。そこには時として、社会主義の目指した「ユートピア」を支持する自分もいれば、それを否定する自分もいる。その白黒つけることのできない、そもそも白黒つける必要などない「生きられた過去」から、『ありえたかもしれない』社会主義への希求」(233)を掬いとるという課題に、著者は多くの一次資料とインタビュー調査結果を駆使することによって果敢に挑戦している。ただし、本書の「果敢さ」に由来するものと思われるが、読み進める上で疑問に思う点や、やや説得力に欠けるように思われる部分もあったので、以下に記したい。

構成について言えば、第一部と第二部は、時代、分析対象、分析方法の全ての点において異なるものである。著者はあえてこの二つの研究成果を合わせることによって、社会主義というユートピアを解釈するという行為において「既存のシステムを超えた新たな価値の追求」(257)が立ち現れていることを証明しようと試みている。ただし、この「新たな可能性」については、著者自身も「可能性のひとつの萌芽」(259)といった控えめな表現をしているように、それが具体的にどのようなものなのかについては掘り下げられていなかった。そのため、第一部と第二部はそれぞれ、独立した別の研究成果という印象が拭えない。

第一部においても、前半は『地下水道』という世界的に有名な物語映画における性愛のテーマが扱われている一方、後半ではおそらく当時のポーランド以外ではあまり知られていないドキュメンタリー映画作品における非行少年のテーマが扱われており、前半と後半の間にギャップが感じられる。例えばドキュメンタリー映画の方は、雪どけ期の性愛関係をどのように描いていたのかということ、また逆に非行少年についての物語映画にはどのようなものがあったのかということについて説明があれば、このギャップは埋められたのではないだろうか。また、『地下水道』についてはすでに多くの先行研究があると思われるが、先行研究と比較してどういった点が本書に独

自な観点なのかが明らかにされていなかった。さらに、『地下水道』における快樂主義的にも見える恋愛関係を「新たに発見された性愛」(116)と評価し、また理解不能なように見える非行少年も実は道を踏み外しただけだとする語りを「新たな社会の自己認識」(149)と結びつけているが、これらのテーマは本当に「新しいもの」と言えるのだろうか。そもそもポーランドにおいてスターリニスト体制が強固であったのが1949年から1956年までの7年程度であり、スターリニズム以前の文化を覚えている人々も多かったわけであるから、これらの禁止されていたテーマが解禁されたというだけで「新しいもの」とみなすことはできない。そもそも、「社会主義リアリズムにおける性愛について、『大義』が達成された暁に与えられる『褒賞』として、『大義』と何の矛盾もなく同居していた」(97)と述べられているが、このように一面的にまとめられるのだろうか、評者はポーランド文化を専門としないものの疑問に感じた。社会主義リアリズム映画のモデルとされていたソ連映画『チャパーエフ』においても、大義のために引き裂かれる恋人たちが描かれている。

本書の本領は、著者によるインタビュー記録からなる第二部であろう。「ポーランド最初の社会主義の町」、「ユートピア都市」(181)であるノヴァ・フータは、社会主義の記憶について検討する上で特異な場所を占めている。そのノヴァ・フータの閉鎖的とも言える住民社会だからこそ保存されているユートピアのかけらを掬い上げるような著者の作業は、ノヴァ・フータ建設のためにやってきた人々がすでに高齢化していることにも鑑みると、大変重要な記録である。

ノヴァ・フータ住民の語りを読んでみると、評者が十年前、クロアチア留学中にしばしば耳にした、「共産主義のときのほうが良かった」という人々の語りとまったくと言っていいほど同じであることに、改めて驚かされた。同様の語りは、旧ユーゴスラヴィアの各地でも聞かれるものである。ノヴァ・フータは特殊な地域であるが、その住民の語りは実のところ、旧共産圏の様々な地域で語られていることと多くの点において共通しているわけであるが、それでは、そのなかでノヴァ・フータ住民の語りの特殊性というものがあるのかどうか、あるとすればそれはどのようなものなのか、ということにも興味を引かれた。残念だったことは、インタビュー記録が三人に限られていたことで、もっと多くの立場の人々の声が聞きたかった。すでにノヴァ・フータを離れている旧住民の記憶とどのように違っているのか、社会的地位はどの程度、社会主義時代についての語りの内容に影響するのか、「連帯」に関わっていた元住民はどのようにノヴァ・フータについて語るのかといったことについても比較検討が行われていれば、ノヴァ・フータという場所から生じた様々な記憶について多角的に考察できたのではないだろうか。また、最後には共産主義ツーリズムといった現在のノヴァ・フータにおける文化実践について述べられているが、特にかつてのニュース映画を模してローカル・ニュース映画を制作するという「ポーランド映画クロニクル」

の事例は大変興味深かった。ノヴァ・フータの人々は、かつてはニュース映画に自身の姿が映るということが日常茶飯事だったということから、「ポーランド映画クロニクル」のプロジェクトはニュース映画に写りこむということをノヴァ・フータの地域アイデンティティとして打ち出し、ローカル・ニュース映画制作を通してコミュニティの再生を図るものである。ニュース映画に写りこませることによって親近感や当事者性を持たせ、イデオロギー宣伝をする方法は、ソ連初期にも映画監督アレクサンドル・メドヴェトキンが映画列車プロジェクトで試みていたことであるが、ノヴァ・フータにおいては社会主義建設の最先端においてだれもが当事者でありえたという過去が、いまでも濃く残存しているのだろうと考えさせられた。

著者が本書の中で繰り返し述べているのは、「社会主義建設のユートピアへの熱狂とそれへの幻滅との間の揺れ動きの中で生まれた、新たなユートピア的想像力のありかたとその可能性を見出すことこそが重要なのである」(260)という主張である。この主張は大変明快で首尾一貫しており、その「新たなユートピア的想像力」とは一体どのようなものなのだろうかと、スリリングな心持ちで読ませる本である。最終的にその答えは読者に開かれたままになっているものの、それも本書の魅力の一つと言えるだろう。

#### 注

<sup>1</sup> 以下、『ユートピアの記憶と今』からの引用は、括弧内にページ数のみを記す。